檽の口術

全

へ 5
4450

俳諧一術

元禄の頃はしめ蕉翁ありて遠し得しより諸
流のよ徳をしりぬ影響移垣風に映すめる猿衰
欲の者は筆鍵をとめなさし此は要さ為すゆめて霞と
なり耐が傍に来ても常にあらそひ侍るに流る人る
森の被れは夢もえぬ残淡説にえなれ先是を
曲る不定て唄るや蕉るや出は来小南と縞よ
折て海は雲の流人小南の何まや為とふ續
俳諧にいなれは民座汐にいえくすまどある宝
郭公一節は和漢の着物をとむ花云ふて無益
の地なり流れは私の庵を捨しとはへとしはつれ

へ5
4450
門 へ 5
號 4450
巻
昭和九年九月二八日
購求

俳ハ昨れ来れん自適て四方の紀方宇廉なる米る
といひ数をたて求られしもの流まり 詞はたし ハ
俄にをしひとつ我路に盧山の景ひとなる〳〵給なるも
こゝに風雅の言葉なり 為に誰られ道に語ひきなり
物種をましなるを一點にとし発して旅の境しきを人に
子もさひしからんとおもふのみ

風雅ハ四時の風雅なる風雅 風雅ハ自然の実を好む
風に一遍に無用なるを雅ハ西家の詞にて給ひし流る
ゆへなり人生れて各風雅なきもの也 静なり
情ハあふるゝ物に感じて詞を探り〳〵ものハ風和
誠の於なり 迄の哥ハ句ハ其情の化なり 虚実の執行

俳諧ハ俳道見失直に風流の法と詩と禅なりといふ
ハ無益なり実より出る風雅を織なしいさゝか貴
あるひハ寸法しきに更なるをいへとも先を発見つくれハ紡る
ゆへに句の流行一句も其道を定し付なや無解の風雅人に
無縁多のなるへし 先此縁語を縁なるとも只実を旨と
云て実に理をいひて後れとも敷ハ句人に好む道なり
我今世の古今諸書に日縁語といふ支世なるに阿ぶらひ
たるとも云と思ひけるさおいて何ぶれ只知まじくものよ
風情なきのふるといふ
発句ハ初て発るの縁を 付句に鉢して発語なり
且なる尽なき小将ハ甚情無なる勤して縁語他哥あり

乙下句なるは世を自然に備へし曲は詞を直し
節は言を継ぐ也員を出る歌調なり△二折にも
折を詠れたる示…も好句あり此頃は名人も素今
折多かりし是出雨里儀祢当は今へし多年続り
此人は俳諧の流を得し翁も頭誥に得
たり是はふとし十ヶ七八は此ぶの変へ十り是創
梅翁流なり初学の人は是の如きにあらぬ文を
立句なる誹諧一句に好をよく句あるとも是
是本に実れ翁が言なり切志は今け不なり
篤きより悪なるその秀ぶ是よき備る歌多く
あり許獨紀氏此人の心知る多様として書

誹諧は是なり先上手なる句にてさ一時節に詞をつ
けかへ一句乃を作りさらしとして甚深句雲煙
此趣は是は切れ字もかと言ふ事なり作る人一
千人が心の上より後の歌の流れが如く平凡に移り
なく其言ふなりて好不好しなのうちは観維のおへ
先をきる不なり故示露軒遊紀の年に不といふ歌
言が拵も是との事や蕉翁歌十二段が総なり一時
動ごきに父母あり母自と求生まる句あり是眺り類
続が別なり其句同しきれば言が頭もよ見やすく
此一所も人詞法とまつりしなれ平生ぞよ
秀句出し待てし後南人が続ぶなり聞後も言よ

さる不易をしらされハ流行さたまる事なしといへるなり
能短拙悪諸体をも備へしらてハあたはす是も翁
有り又復称合目なり此等の類ハ時節に拘らすして
讀われて翁あり御経文字のわれ多くの類ハ曲者あるとも
西よりの如くハ動かすとてさりとて不易流行合ス
能知えしあり又是等しさとは其ハ一方向り新師の事
古翁の門下にて是を説にの道ハなり皆自己の説之
新たに為すの趣なり然るに不易流行の論ハ多く説く先
随ひてし不易ハ定の備る所にて理也流行ハ
時々に風を変へて変化すれとも有るへく
流行と云ふ時ハ不易を背くは不易然して流行ナ

所謂流行ハ不易を元として勝ちたる流行ハ則の
ある所なり是故に二字の如きものにて不易ハ
其ひて流行しやすく流行ハ平安なるを
一雑の人々にし翁の流行せし趣なれハ従来として
不易を失ひて一人の勉学して不易とは学れ
謂ゆる蝶の如く時ハ季を云て花さくらハ流行なり
不易の理を守る蝶の形れ死ぬる支速なり然るに
正しき所を解し抱揚して急死を送る不易ハ流行之
草の盗めるものとす流行なるんとやらく流行
予未たとをわす自然とも不易の田舎の得之又独断を
人有りし人の喧嘩に揚へられさんし病を負ひ速やかに

しかと人の句第一に格もなく見苦しく侍るとし
云しても面白けれハ其情をあらはし只めつらしき切の句る
このありさま情をよく尽る人の是非坊ハせさる申へ
尤安し坊人あれハ只ありて是非にもならひ侍るよし
是非事もあましとかなれ流行ニ一定ならぬ事ハ甚
其の道の誠ハ其事ハかハらぬ所なる又流行ニよりて目新しき
新しき風雅ハ年月ハ急き行侍りん元来ハ云ひなれハ人も
ありし此頃ハ御流行もさへなりし御流行ニ句まさ人あり
宗鑑より以来元ハ人のいふ所まて句をかへ縁く正文
其人のいひ侍るゆへ今ハ上代の事を自らのかるとし四つ
為則ハ其角侍るまて和る人しか事ハ流行となるしこ

すなハち以て是を思ひ大きにかハらぬ事ハ小芝居ありけれ
物をして人ハ此則しハとハ案じ侍らんや

発句論

日本ニ云ハまさに此の不霊ハ何中にこそあれ
先此理を以てよろしく申べきなり和歌ハ云ふとよせつき
句をもつハ今それと其国の人ニ分かり其国ハ其国の風俗や
不出ハ侍るしかれ共其意を読味まして此誠の実と
奇妙なり

初夢や額にあつる扇かな

當世の風をさきに初声この句
辞してのち面白きをやりてこそいれハ流行なりとき

当句は始しに不なり　能是よりし初心は句ハ其五拍子
趣をよく勝る様を作らんの為前を打ちしむけ類よ
唐様を用て様々も風体を思ひ参なる意様子
付句は其才を味わ首尾初心の絵なると誂んて
作り方のなり驚は歌を逆にと思ひなつ書い
事見よて一合なると学へ初心は如なりし上様ま縁
様子様の知し小きれハ又本句をも見るハ平家なき
又行来は集よハ発句は句ハをよしく作をと様て
自物も唐も句をなり乗して絵のなん人を御絵平
論なれ様子ハ作て縁をもゆ論なり　先ハ清形れ
為ホ条の事ふハ申されなり　其の清形をよみとあるふ

となふへし御絵をも知て絵をも書給へんハ其の御さ
そわへし絵書の御絵ハ様子屋と同じまし
いわへしよそよりよりも世に知れたる一家人に絵の
為人多し又絵平に名ある家人ハ寸作れ
面白き秘密なるふや其も云
是なるまでといふて世を盛へしなるふやといふて
其書は絵なるやみるに工夫あるへし
　持主よつ書成文字ハなし江戸の其
其句様得の動屋の絹加用と云草紙に江戸の所さ
又見世様子様の之人地云動絵に京に持主の書成
目ハなし其要の為にも先様よハあるとまして其なるし

趣向を専とせざるは句云ふ方あるへし
物淋敷事なれハ[illegible]　江戸如雲
其あしらひに句作ハ殊に広く節季を抱きて云ハ
云ふに最も[illegible]又広きに[illegible]
よく附られし理屈なき附る
陸奥ハ並もなき附たる　仲秋　[illegible]
此句評あるに花は[illegible]なきを一ようく云付へしられ[illegible]
其に至るまで[illegible]もよく附たる
陸奥ハ名も実も細く[illegible]花
陸奥ハ一万[illegible]咲くらんか
何ま[illegible]なり秋風を使ふ句[illegible]をよく附たる句の

陸奥とさへ云ふより古人ハ[illegible]いづれ[illegible]
句作[illegible]国の[illegible]よく付し[illegible]人
[illegible]して[illegible]句[illegible]人も句[illegible]多く
[illegible]の[illegible]して[illegible]人の上ハ[illegible]人の
云[illegible]人も[illegible]
[illegible]句を[illegible]及
[illegible]
[illegible]へし
　　[illegible]ハ[illegible]
[illegible]涼
[illegible]
[illegible]

此丸薬代御紙ハ厚様ニハカ不ゝ不通なるを力テ
せうあまなれし探候て言んより金ノ度ニ言葉ニ
筆始なり是ハ只ハ五ノ紙をし人ゝ見ゆしく
言ひ叶ふ事ニ薬れ自然れ御文ヲ金ノ度をと言合せ
なるを作して手紙是ハ思ひ始ハ是ひやといへん和
をさまよと言給ひなるいつまでも申され給ふ只今ハ
習ひて源氏より王文字ハあるものなり紙面ハ金ノ度
此書なるさよとのまでハお後れつ人ゝ見をと始るせん
やうな上巳ニ御雛稲り御引祠ひハ行て稜まで行なる
ん見より猿猴ありハ手紙書し給なるハ是自然ハ
御なるされハなり切売も初心を只一行ニ言ひ合し

なる自然始るニおもひてもニ文字ニまをと行なるまをさいし
又始なるニ無をと求ハ之代始まり上申之此丸松代る句の
言葉にはその度まであなるハ無をと以て言さ申し
おし書き始るハ無をと以てかさねる之今度をと甚文
始るそのニ度会なる辺るまる便しさニあはれ噫なる
そのニ男をさ抽言まさニそのニ言まをる文をと会せるるハ
御力始るかハそのし又あつてハ初ニ言まさハ初抽しさ
年常書を文をし言会せ給る文ハ御紙の文て初のを
始めり手紙をまで是二り始情を路飯り自然松まる
稀り御冬
菊蔭ニ冬二武葉の末

早稲田大学図書

此句ある人の曰桃さくらを何かは云ふにや悦ひ給
らんよしは蕉翁の自ら物にし知る者説なり
然るに此はさんなりは宮あるをも其ありこんはやくて
貴り給ふ実かして京にて続きにて云ひ置給文句へ
さる物にて饒味すへし

八つ屋やひとつもしそ気もなく
金屋の涼みや龍門ありいむきひ
住房に夷にあらや秋風の他

何さとなきは句まつ八つ屋住房ともに一つ迚てなる
御事きこそのうちは何ふれ桃を然るるしき斤清まかなる
説をさるのさ文論元の面ともとなるへきまして豈

蕉翁の言不叶ひ侍らんや其の風雅人は翁のこゝひ
離し玉ふされは世の中をもて又かくて何らんの物と思ひはるは
あらて此道の至人といふへし但よくいつく迚知人の
人ならぬ句の作為拙き一の癖し先其の人為切去
をはて仰さる故に先句をこそ浅ひとの有りか其を
智人は不知業平の若をと論ある故ひなり
ふられ涼無しの故いさこそ仕しきの故
拠ひは涼きもの言をもの何事とそ
世の中一言をけて
此の細蕉翁門の智ひなり故句を選ぬと云て
大祭故句打事住て然は云ふまけりしき詞と云ふ人

置べし　蕉門の俳諧は俳言なくとも申し発句を
切字なくとも申ものなれは中にも人を専とし一句を風雅とし
往古の連歌をも用ゆれ俳諧よりも詩の心ある句あり
されば是ハ御剣を賜はせ給ふに年寄の
主膳貞徳は俳諧を相戯ふれと口決ありて尽くし
と俳諧又利口を旨として主膳意して其中にも
主に俗達あり詩を李杜に倣ひ之に入而行俳国の
其故しかる風流風雅なきものを無きゆへあり
俳諧せざるなる三十年蕉翁一流の風雅を起し
其の数千万をもなし給ふといへども句に俳諧
ある事を知るべし　十七字とても俳言なかりとも

俳諧をなさゞる句あり　又発句の趣向に俳諧ありて是を
見ざる人いかでか蕉門の俳言を批判すべき（容）かくてハ
俳諧とせざるの言なり　連歌ハ前句を見て意を
付る事俳諧ハ名人の云ざる事を故人申しといへり付る
切字の事も又此伝書にも書付る切字とて五ツ
入たりとも切ざる句ハ切字なり　是および蕉門の発句ハ
切一ッなり　後世又名人出ても一字一句極る人も極る
人も知べし　発句ハ一句に一句を立て付ざる事と
句の中に付る句ならぬと有り　俳諧に付句をあるやうに
論ずる事あるハ　蕉門の付句次第歌みすて果さき
こゝに談義深川翁もしきに発句継ぎるとの俳も誠なりこ

ゑさこ猿蓑深川といふ集なと撰ありて行はしさ
いふをとゞめしたるなどあり炭俵続猿蓑といふ集三
ちかはれなるありて自由しるさに宜しなるなり
手帳理窟を破りてよりて手鏡は誹といふ支考なり
婦は誹へならで一言に露迎紀の年虚縁なし人其な
俳諧はいて己のみもんと切待わし附其子貞なりけると
又此俳諧なりと被へ誹て為人悟られ言ていえく
家子貞の業平俳諧を極ると思ひ知人と
誹り誹へるよしこれ法へて金言なり師の人に敬へ
誹へる支人ゝの句徴にまかて蕉誹へなりとて是偏と
まししさを説誹ふと云ふは世に其言ある人乎

悟して別し一悟さしには唐志見て敬へなりし句を向一気
句は気まてと敬へ誹て元来これし急人の附として
一句平胸を痛むへし誹へる附かりなきより論之すしに
是さ人の云なりしたる句を悟れ甚こそ好みものて
斗に作る句も言動誹へて其句は気之まゝ一躰のなり
多年携わりぬ人は甚功に老いて之ぬのて句も唐思ふ
こまなをのなり只是をと論作るぬなり斬新なり
甚まけこまになりむやみへ行く平すりあけなきに成人
支なる俗を言人ゝ一念携り好みなりし思しては家中平
極めの本の学はきを一印者には論として俳諧一流変平
是たる平なまれ上手と云達人より初心と知をへと戒む

誹諧の時なりし無師をとあやまる人多し
又言葉しらずして四指句を作らんと脇句を好みて之
前人の教へは言葉にまかせて道を越て川を仕継ぎを
忘れたる人あり前者は風雅にして人丸小町業平定
家西行の類なり後は俳道の人なり芭蕉翁も祇園なと
一体者にして道を尊みして一たひ諺にも時に及ぶ
事ハ道をこひて手を取りて見なるいかに何れ
風雅の道あらん又言葉にかけ付けたる教へ見て
此二つを忘れたるなり凡ハ一句に一句をいはく古来
の俳諧の句は十句に八九句はこれを真似し然れ共無師にして
流布したるも十に七八は当人の教へ者也至竹

梅の句の事なりや竹を流しきと見えたるをかへる
西をき昔ふ松尾芭蕉にいはく此句あり其句も友感
其句をも読みて其事のなさにかくれ句あり京風に
おひては指月居を論破し其句をとりて思案を
未一とせの後句作しきまさしくたりし不易流行の不平
あるといふてし誹にかりしき説をもよれ其翁の句を
其年に此の俳諧せしそのなり此の句はまきを
をたてしなかなりし此本の指導にこてゆるを大きに
なりけり是けむもくしきをすれ解さるゝこと
其心の外に我をいひ切りしは悉くも言ひて何れ
風雅を好し芭蕉の人は年古れ其后ならは如

こゝろあり　見れハ其さま凡におもしろきものゝ家従れ
句ハあまりくたけすしては姿おもしろからす　近年ハ是を
年寄れともさゝやきし是只様をのへたるこ(と)く
おもしろかるへし
恋句ハ二句より五句まては云続け事を出候れ
ハあり一句にても捨るありし　古人ハ恋の続候を足らす
恋れうなきさへ何れにあるも句数ハ恋の句たるへしと定
句の中へ其何ある句をと(ゝ)ハけ人とも一句にても
捨たるハ(ゝ)しりたるにはとある事ハあまりに姫娘
此節傾城様ハ恋あるゆへと云ハかくし女姫を
ハ様共其身にてハ用捨有之へし　右之へ
表におゐて是ありとも其用心有之へし　用る時ハ皆
恋なり　用ひさる時ハ恋なきゆへ女なきハ男も恋
なくん女の出る様なきゆへとハ男色の様子定まれ
理なり　されハ女をも男をも恋となさす捨ハ其れ
おのつからありて兵をも(ゝ)さへもハせしハ是恋
唯男の句と女の句をと云出し又ハ女句ハ十句より八句まて一
恋の(ゝ)のなかり(ゝ)を帰り古き句を
ゑ人に(ゝ)(ゝ)事を(ゝ)(ゝ)
能く(ゝ)(ゝ)(ゝ)(ゝ)男をとられて
松の(ゝ)ハ陽に(ゝ)(ゝ)和漢
ともに恋の方にて(ゝ)ありとも　続八十の(ゝ)

意を只ふくみに格意の情は意へし　色になく只ふくみを
なくハ始末にいふにハ何共意の心ふかく味へ
然れとも格わる文字さへあれハ恐意なりとおもひ
其意れ情に心付句なりけれハ人句をせんより
只一句立てに格たるよしとすれハめひりしハ二句より
三句まては縁付の句ハ面白きものにて云る
不あり春秋ハ嗜ねし多き用へ句数もあり只冬ハ季
すくなし又恋句おほれたる様句ちに意の詞をいれて
云なくり恋なりとおもへり大かた恋句より格まさを
おもしろき句も少しものなり春秋也に二句まては格
違さ場あらぬを格帰りさこのまに行ける事

たる誹諧ハ業をしりて其の句をしらぬ人なりとを
さみすへし　格を書置十七字なりと思ふは縁なかり
初心の人知て情をしらて本意と翁の戒給へり恋句
一句立てに格たることいつまてなされし行婦と媒妬
傾城我か身の恋なれにハ面白さし恋の情といふハたし今
眼をはらし傾城と格をあらそへ我か身の上少きうち
ようせハ業といふものなり只ふみて知らるれ不叶
して叶ひ恨みて叶ふまれ然ひ浮世恋の情なり
又今此我か身傾城売かりて格に句下手の句よへ
ハ例れそハ能詞と讃へし　或七夕の句あり加茂の祭り
格よ下格ひたる儀に用れあされてよりおもき

根こそぎとなりけるを月やけ秋の細くなる折から
はさられしやらず流れし川のそこにこそ大空の
下をわたる硯むかひて侍りしなかさへ余を書るなり
秋の田の東に振ひ麻の糸にかけたる彼や旅の笠
をわたりはかゆかず御侍しみ言なりし人もさりて出し来
なふぬをとなつしものこそ見ひとつあはれ多かしくなる
の似る為始める新の竹さしき狗所の東のれ
二路の路毎千の一方より似たる海つきなりこそ
うりしきなる道の物をおこなくしのとふ所よ
こへ行とちりく人のその言ひおたるまいこ所山ふへ嫁と
在右の月の心なふ人も知り侍るをとあやしひ侍りてい

親のいさめ光我か中を隔てゝ侍るハいとかなし
しく嫁しきこゝにきたりしの外へしは或は芝居の
噺れ百日の稽いり葉の観音の日おくりをかへし
なきに二人こ人あつまりてをつ往来の金乃内をとし
見たるさしと見の言たりしなく論を尤もみいと
ふ付をとらうれ其るは売き人の意こそ知りしきこ恋
松本た人たるの味噌実白粉行きなふ宵の根こそ
こ積けた勢の目をさむひ新秋の面影の一ツを
たのミ四辻の霊語をさたし其の往こハ十里下
寛をと來て髪れるは其ましく似るたるかなこ
こゝかさなるくれてをと見すいこ恋の情なり

詞はさんと梅にせよて投さと明して
ともかくの思ひ詠みくらしつ
月や何ぞ其毒書れたるなかるべき
詠み哉ともいふところの才わりして
長歌詩一首けなさとも長哥作者にゆるし給ふ絶
せられたる詞はせずれ哥人は長哥よ俳人時は此哥を味ふ
べしと言ふ事何にも俳ひれしよし又新哥俳諧ずと言ひ
本情は長へし猿の句なれと為工夫をへし更して
何れ句よりも神（タマシイ）をいれ更ニ一在り句は神なきれは其の俳
作りは其のとぬけたる中ニ在るは無道に実も具有すれと
もむなし神入ざるもの一段猿ぬう俳諧すたるやうにして

一俳諧を和歌のごとく心得たる人は俳諧の文章とのゝ心
先師は云只文章にて俳諧を詠めらるれはよしと
ほんとうに俳諧の有るなり云ことは雑俳に添えへしと
風雅の只文と只の有るの道にあり見るを無へたる
在りと雖も是を他人に大切にすへし得とるを直
俳名は此一句は天地ニ水の源に猿を要と俳句
多く有りし事もさうやうて常門に示めてはさ又
道にて猿長月京ふ記して来るものには只に実
やすきは是をもつて見せよ投ひたりし又なり
さりとは俳もとへし京極黄門も詠句ニ表述
多しともいふ哥にし俳文も年やうと紀お勝ハ

俳諧なとしらさるなきは中ころ又梶原なとなり
宗鑑か句は村夫野俗へきものにて其後貞徳の好れ
多く俳諧大笑をやらしめて曲りなる俳諧を綴りた
ききぬし又松永なる人は日称をと伺なるまゝにて
京の芭蕉翁の俳諧なりしと多く京に其外にも流行をと
こまりし俳諧是又大なる難人なり初学の人には
風雅を取しまし其句は俳諧を本とし中へ此の俳諧
十句か五句は南門の句也人の俳句なり句は其中
其角には京は嵐雪其外南門の句也とこさに
江戸へは其角嵐雪あるへしと京に貞室こと
又中なるは其の手柄あるなり其後は集撰なるへし

当世は俳諧にして其句は撰へるとあれ
是非を見るへし芭蕉翁を師とし二年三年よ
集なりし俳諧よりし是は元禄の頃へ俳諧の道
京国分俳諧なとなりして人家を争ひ集なり
是を手柄と思へり其後再び長る集を見へ俳諧
家翁は天下の俳諧を師とせしよりまた其後
甲戴発して人是非家りていよいよ道々翁なし
其に俳諧は天下の俳諧の師あり初め説く天下の
俳諧初手なるにも不遷化の風を抱きし人の
して其句の撰集編者なりけるといへとも人の
よし一句をもなきいふなる一代一集まてに

人の見る所へ無道乃面目と初心なる人ハ如斯に
結ひて句を作る者多し　然るに集を編む句をも道
しき迄書きてへ絡るハ見苦しき事なり　高ゐたり
に　御製二十首をなすに道より出けるか中へいりしも
前言あるにハ初めしけなきと風雅の道なりし　縦令
それは因縁なり　上手れ句迄も十句か十句丈ハなし
まさに綿ある間えよく　高就し人なしなるに　作
去迄とさ覚え居経る不斜　拙なり又離して能覚るに
人もまた綴ハ理なと云へハ是ハ許をいはす年に是実ハ
年に先手なる人あると拿ふなる也へなり　高年まりて
下の源氏一にて読座になりて　南門石なとなり

傍人殊にかくしきは縁なり　左翁一代句を数理して
説けるとのなきは名人なる事き道なり　従無学を
見る人をも此理をなつかしと思われ

元禄十五年写　八月日

東武雑坂庵舎記

無為陽生翁直書を写す事にしより
和歌七ふ秋

蓮之　蔵